



中47回5年甲組クラス写真(1946(昭和21)年4月撮影)

担任は高橋寅蔵先生。同級生135名が4年修了で卒業(中46回)したので、1クラス毎の人数が減っている。(中47回・旧職員小沼三郎氏蔵)

戦時下の土浦中学生18

～中学46・47回、戦争に苛まれた学びの日々2～

中46・47回生は、入学は同じ1942(昭和17)年度で、1943年1月公布の、修業年限を4年に短縮する「中等学校令(勅令第36号)」による1946年3月の卒業生が46回生、1946年2月の、修業年限を5年に戻す「中等学校令一部改正(勅令第102号)」による1947年3月の卒業生が47回生です。今号では、今年5月に、高21回松井泰寿・鴻巣茂が、本校英語科旧職員小沼三郎氏(中47回)から伺った土中生活などについて紹介します。

憧れの土中への入学

小沼氏は、小川町(現小美玉市)のお生まれで、小川尋常小学校の卒業です。実家は鹿島参宮鉄道(注)の常陸小川駅から徒歩2〜3分の所です。当時、小沼家では、桐材の製材・卸業を営んでおり、下駄や酒樽の香口(注ぎ口の部品)の製造もしていたので、常時5〜6名の職人が出入りしていたそうです。

土浦中学校の入学試験には4名が受験しましたが、2名しか合格しませんでした。毎年2〜3名の入学でしたので、小川尋常小学校出身者は、全学年合わせても10名くらいでした。

1942(昭和17)年4月、憧れの土浦中学校に入学しました。詰め襟ではなく、国防服に戦闘帽を被り、足にはゲートルを巻いて登校しました。先輩は詰め襟の学生服でしたので、多少羨ましい気もしましたが、1年生は全員が国防服なので、仕方が無いと思っていました。鹿島参宮鉄道で石岡へ出て、石岡から常磐線を通いました。自宅から自転車が高浜駅まで行き、そこから常磐線で通学した時もありました。6時頃に家を出て、8時過ぎに土中に着きました。土浦駅からは徒歩です。駅前通りから現在のつくば銀行の所を右折して、土浦城の北門跡に出て、新川を渡って、土中を目指しました(奇しくも、現在の住居「土浦市中央」の前の道を5年間通っていた)。戦時中でしたので、同じ列車で来た者は、真鍋台まで隊列を組んで登校しました(帰りは、下校時刻が異なるため、それぞれに下校していた)。1年生を先頭に最後尾が5年生で、5年生が号令を掛け、歩調を揃えて歩きました。先生に出会おうと、5年生が「歩調取れ、頭右、敬礼!」と、大声で号令を掛けるので、全員が一斉に先生に敬礼をします。私たちは当然のように思っていました。軍人でもない先生方はどのように思っているのかわかりませんが、土浦高等

女学校(現土浦二高)の女子生徒も一緒にしたが、列車は別車両(自然と女性専用車が出ていた)。土浦駅からつくば銀行の所までは、それぞれが道路の反対側を歩いていました。そのため、土浦高女に通っていた小川小の同級生とは1度も話をしたことはありません。

勤労動員

1年次には、ほぼ平常どおりに授業が行われていましたが、2年次(1943年度)になると、勤労奉仕が増えてきました。春秋の農繁期には、出征兵士の居る農家へ援農作業に通いました。冬季には千代田村(現かずみがうら市)佐谷の農家に数日間分宿して、水田の暗渠排水作業に従事しました。水田を背の高さほどに掘り下げて、底に竹や粗朶を敷き、埋め戻す作業です。寒い冬の日にはスコップ1つでの作業は、中学生には辛い仕事でした。農家の方々は大変感謝してくれました。食事は一汁一菜でしたが、ご飯はいくらでも食べさせてくれました。当時、既に米は貴重品になっていましたので、腹いっぱい食べた銀シャリの味は今でも忘れることができませぬ。3年次(1944年度)の7月から、4・5年生が通年動員となり、学校ががらんとしてしまい、寂しくなりましたが、正直、ほっとした思いもありました。5年生の教室の脇を通ると怒鳴られ、制裁を受けた者も居ましたので、1年生の時などは怖くて通れません。職員室に用事がある時でも、遠回りして行きました。それが突然、4・5年生が居なくなりました。私たちが最上級生になってしまいました。それで早速、下級生に気合を入れた猛者も居たようです。

1945年に入ると、戦局はいよいよ逼迫し、私たち3年生も通年動員に駆り出されました。1月27日に通年動員壮行会が行われ、1月30日に第一海軍航空隊へ入隊しました。戦後、恩師の土井鱗助先生(数学科)から伺った話では、私たちは当初、横須賀の海軍工廠へ動員予定であったのを、宗光太田校長と土井先生とが海軍当局と交渉をして、第一海軍航空隊に変更してもらったそうです。入隊すると、最初は養成班で、ハンマーや鑿の使い方、鑪の掛け方などの指導を受けました。その後、各部に配属となりましたが、私は飛行機部品係となりました。各部からの注文に合わせて、部品を揃えて届ける仕事です。徴用工の方々が部品の管理をされていました。発注を受けた部品が無いという事はありませんでしたので、特に飛行機部門には最優先で物資が配給されていたのだと思います。私たちは、発注された部品をリヤカーに載せて運んでいました。何しろ広い敷地です。重いリヤカーを引いて、工場内を何往復もすると疲れが出てきます。暑い日に木陰の路肩で休んでいると、後ろから航空隊へも小川の実家から通いました。鹿島参宮鉄道と常磐線とを乗り継ぎ、荒川沖駅からは徒歩で航空隊へ急ぎます。航空隊も度々空襲を受けるようになっていました。荒川沖駅で空襲を受けたこともありました。荒川沖駅で下車すると、空襲警報が鳴り響き、「総員待避!」の聲が聞こえてきました。乗客が避難を始めると同時に、P51戦闘機が襲って来ました。私たちは線路へ飛び降り、ホームの下へ身を隠しました。航空隊を攻撃した編隊の1機が駅を狙ったようです。この頃には、毎日のように、特攻機が編隊を組んで、百里原海軍航空基地から南へ飛び立って行くのを、自宅から眺めていたので、これから日本はどうなるのだろう、と思っていました。7月初め頃、私たちの学年の1クラスが笠間の福原へ移動になりました。空襲を避けるために航空隊のいくつかの工場が疎開になったの

です。工員や動員生徒も一緒に移動し、同級生たちは工場近くの寮に入りました。旋盤の仕事に従事していたようですが、農家の納屋を改造した寮で、畳も無く、雑魚寝同然の状態でした。当時は航空敵の食事も粗末なものになっていました。福原は更に酷くて、栄養失調者が多数出たそうです。



戦前の荒川沖駅(『むかしの写真土浦』より)
右手前が駅舎。上りホームから牛久方面を望む。上空には霞ヶ浦海軍航空隊の複葉練習機が飛んでいる。

に行われ、翌21日が全校登校日となりました。久しぶりに校舎に入ってみると、校舎の天井板は、焼夷弾が引つ掛かるのを防ぐためとの理由で取り外されており、屋根組みが見えていました。中庭で集会が持たれ、そこで、2年生以上の動員生徒は8月22日から31日まで休業、1年生は学校で馬鈴薯の植え付け準備、堆肥製造、除草、馬鈴薯植え付けなどの農作業に当たれ、との指示がありました。指示に従い、自宅で休んでいましたが、その間に、校庭の一隅に設置されていた佐久良東雄の歌碑や藤田東湖の像は、軍色が濃いとされ、埋められたようです。

戦後の土中生活

9月1日が始業式で、中庭に集合すると、国防服・軍服・学生服、学生帽・戦闘帽・予科練の制帽といった、様々な格好の生徒たちで溢れていました。予科練や少年飛行兵学校から復学してきた生徒(彼らが話す軍隊生活の様子をみんなが興味を持って聴いていた)、疎開してきた生徒などで、生徒数が急増していたのです。教室はおろか廊下にまで机・椅子が置いてありました。5年生であるべき中45回生は、4年修了で繰り上げ卒業をしていたので、4年生の私たちが最上級生になっていました。先生方からは「お前たちが、しっかり後輩を指導し、土浦中学を立て直せ。」と言われましたが、後輩の面倒を見ていられるような状況ではありません。

終戦
8月15日の終戦の玉音放送は、航空敵で聴きました。《重大放送》があるからと広場に集められ、技術将校や工員たちと一緒に聴きました。雑音が多くて何を言っているのか分かりません。しかし、戦争に負けるのは夢にも思っていないませんでしたから、「本土決戦に備えて、頑張れ!」という激励のお言葉だと受け取りました。将校や工員たちがひそひそ話をすることを聴くうちに、戦争に負けたことが分かってきました。生徒たちは誰1人言葉を交わす者は無く、重い足取りで、呆然と家路を辿りました。

航空敵に動員されていた生徒(土浦中学校では2年生以上)の退廠式が、8月20日

9月中は、軍の機材の後始末や赤池の開墾、学校での農作業、出征兵士の居る家庭への援農作業に従事しました。10月に入って、授業が中心の学校生活にやっとなりましたが、古い教科書には墨が塗られ、新しい教科書はまだ配給されず、先生の板書をひたすら写していたのを覚えています。そのうちガリ版摺りのプリントが支給されましたが、教科書と呼べ

るようなものではありません。それでも、授業が受けられる喜びは、何物にも代えられません。しかし、12月15日から、石炭の供給不足のため、常磐線ダイヤが5割削減となり、通学生の定期券使用が停止され(1946年1月末まで)、登校不可能な生徒は自宅学習となりました。私も小川町から通学できなくなり、自宅学習となりました。教科書も無く、何を勉強してよいのか分かりません。先生方は自転車で出張し、生徒の様子を見て回ったようですが、小川町までは来られませんでしたが、2月には登校できるようになりましたが、4年で卒業して、就職するか、上級学校へ進学するか、中学5年に進級するかの選択を迫られました。修業年限が5年に戻され、私たちには卒業と進級、そのどちらも認められたのです。私は、上級学校進学を希望していましたが、この学力では進学できても将来は遣って行けないだろう、と思い、5年に進級しました。3月25日、中46回の卒業式が挙行され、同級生である卒業生135名を、5年進級者144名を送り出しました。困難な時代でしたので、お互いに、「頑張れ!」との思いしかありませんでした。

進学、そして教師としての土浦一高

私は、進学して英語を学びたいと思っていました。自信も無く、進路を決め兼ねていました。そこで、英語科の林卯一郎先生に相談をすると、先生は、「これからは必ず英語の時代が来る。英米の文化を知る上で益々必要になると思う。小沼は英語がよくできるようだし、しっかりと頑張りなさい。」と励ましてくださいました。林先生のお言葉のお蔭で、早大予科に合格、親戚の家から通学することになりました。高田馬場も空襲を受け、1つの机に何人もの学生が座って講義を受けるような状態でした。駅周辺にはバラックが建ち並んでいました。大変な学生

生活を送りましたが、新制早稲田大学を卒業し、教員の道に進みました。教員として、土浦一高に19年間お世話になりましたが、その間、素晴らしい生徒たちに恵まれ、教師冥利に尽きる日々を送らせていただきました。今思えば、生徒(後輩)諸君から幸せを貰っていたと思います。

卒業回への想い

私たち昭和17年入学生は、中46・47回と二分されて今日まで来ました。何度か、「卒業回を一緒にしてくれ。」と学校側にお願いをしましたが、学校側は、「中学1回以来、何回目の卒業式ということの数えているから。」との一点張り。ところが明きません。とうとう根負けをして諦めました。しかし私たち46・47回生は、毎年8月15日に同窓会を開き、80歳の年まで続けてきました。命懸けの動員生活を送り、苦勞を共にしてきた私たちは、戦友同様の固い絆で結ばれた学年だ、と思っています。

(注)鹿島参宮鉄道

石岡(鉾田間)を結んでいた私鉄で、1924(大正13)年、石岡(常陸小川間)で営業を開始し、1929(昭和4)年に全線が開通した。1965(昭和40)年に常総筑波鉄道と合併し、関東鉄道鉾田線となる。1991(昭和54)年、関東鉄道の鉾田線と筑波線の分社化により、鉾田線は鹿島鉄道となったが、2007(平成19)年3月31日の運行を最後に、84年の歴史に幕を閉じた。

(高21回 松井泰寿)

静岡県立磐田南高校同窓会諸氏来校

10月27日(土)、見附中学(現磐田南高)の初代校長尾崎楠馬・初代教頭小田原勇両先生の足跡を訪ね、浅羽浩同窓会長ほか12名が来校されました。尾崎先生は本校校歌の作曲者、小田原先生は本校ポト部設立者です。磐田南では創立100周年を控え、両先生に関する資料を収集しているとのこと。

本校からは、大曾根宏亮同窓会副会長以下が参加。両先生の資料提供及びその説明を行い、両先生への想いや同窓会への思いなどを語り合いました。